

【vol.18】インターバルの呼び方と、メジャースケールの重要ポジション

どうも、大沼です。

前回、全ての音楽理論の基礎となる、
『メジャースケール』の内容に入っていましたね。

ここ最近やっていたことから一転、テキストの文章量が増えました。笑

前回、新しい音楽用語も出てきましたね。

そう、今回のタイトルにもある、

『インターバル』

の事です。

インターバルの概念は音楽理論を学ぶのに、必須の知識です。

もう、これがわかっていないと、
音楽理論(というか音楽の構造全般)が全て理解できない、
と言っても過言ではありません。

この先の内容も、その『インターバル』を理解している事を前提として、
スケール理論、コード理論など解説していきます。

Cメジャースケールに続いて、『必須事項ばっかじゃねーか!』、
と思うかもしれませんが、でも、そうなんです。

必須事項なんです。笑

仮に、このような必須の知識を、すでに全て覚えて理解しているのであれば、
おそらくあなたは、今、ギターの上達に悩むと言う事は、ほぼ無いでしょう。

なぜなら、そういうレベルに達している人は、

『問題が出てきたとしても、解決策を自分で見つけられるから』

ですね。

自分で耳コピーも出来るし、オリジナルの練習メニューも作れるし、アドリブも作曲も出来るし、と、大概のことが可能なはずです。

何度も言っていますが、この講座は、あなたにそういうレベルに到達してもらう為の講座です。

「自由にギターが弾けるようになりたい」という人は沢山いますが、当然、そこにいくまでには、色々やるべきことがありますよね。

その『自由』までにある、色々な障害や困難をぶち破っていく為の知識と技術をマスターしてもらうのがこの講座の目的です。

では早速、今回もやっていきましょうか。

今回覚えることは、

- ・『ダイアトニックスケールという言葉の意味』
- ・『インターバルの呼び方』
- ・『メジャースケールの代表的なポジション』

この3つです。

さて、今回はCメジャースケールを例に、メジャースケールの仕組みを学びました。

ちょっと覚えることが多かったので、要点をまとめてみましょう。

要点は3つありましたね。

- ・メジャースケールは全7音で構成されている
- ・『インターバル』とは、ある音と、ある音の距離を数字(とアルファベット)で表したものである
- ・メジャースケールとは、
『トニックから、全全半全全全半のインターバルで音が並んでいる音階のこと』である

と、この3つです。

これを基本に、今回の内容を学んでいきます。
ではまず、先ほども書きましたが、1つ目はこちら。

・『ダイアトニックスケールという言葉の意味』

これについてやっていきましょう。

さて、『トニック』と『スケール』については、前回のメジャースケールの時にもやってますし、ペンタでも少し解説しましたね。

『トニック』は『主音』、『スケール』は『音階』という意味でした。

では残りの1つ、『ダイア』。

これなんですが、音楽用語としては、大方『ダイアトニック』までで一括りで、意味としては、『全音階的な(何か)』になります。

『全音階的な』と言われても、「なんだそりゃ」と言う感じだと思いますが、『クロマチック=半音階的な(何か)』と、対になっている言葉ですね。

『クロマチック(半音階的なもの)』と対になっているので、『ダイアトニック』と言う単語の付くものは、『全音階的なもの』をどこかに含んでいるわけです。

ギターの指板上で視覚的に見るならば、『クロマチック(半音)』は、ある音とある音が1フレット分の距離にあることを意味し、『全音』は2フレット分の距離にある事を意味します。
(※例えば、ミとファは半音、ドとレは全音の間隔(音の距離))

以上の事を踏まえて考えると、『ダイアトニックスケール』と言うモノは、大きく捉えるならば、そのスケールの中に、『全音的(な部分)』を含んでいる、と考えられますね。

我々がやっている音楽(≡ポピュラーミュージック)は、基本的には、1オクターブを12等分した、12平均律を使って構成されています。

ギターで見ると、「1弦開放のE音」から、その1オクターブ上の「1弦12フレットのE音」まで、12個フレットが打ってあるので、普通に弾くのであれば、最大12音(12種類の音が)出せるわけです。

この12音は、フレット1つ分の距離で並んでいるので、クロマチック(半音)な音列(≡音階、スケール)ですね。

じゃあ次に、この 12 のクロマチックな(半音的な)音の列の中に、『全音＝音と音の間が 2 フレットの距離』をいくつか含めてスケールを作ってみると、鳴らす音(スケールの構成音)の数が、12 音から少し減るわけです。

で、今、学んでいる『メジャースケール』なんですが、

『全全半全全全半のインターバルで音が並んでいる、全 7 音構成のスケール』

でしたね。

と、言う事は、とりあえずここまでの解説を踏まえて考えると、

『メジャースケールは、全音(的な距離関係にある音)を含む音階』

と見ることが出来るので、

『メジャースケールはダイアトニックスケール(の 1 種)である』

と、言えそうですね。

ここで結論を先に言ってしまうと、『ダイアトニックスケール』と言う言葉は、ほぼ、そのスケールの中に、

『全音の距離を 5 つ、半音の距離を 2 つ含むスケール』

の事を指します。(※メジャースケールがそうですね。)

これは何故こうなっているのかと言うと、古代ギリシャ音楽のテトラコルド(テトラコード)と言うものが元なのですが、そこについては現段階では別に気にしなくても OK です。

とりあえず今は、

『12 平均律の 12 の半音関係にある音列の中に、全音間隔を 5 つ、半音間隔を 2 つ入れて音階(スケール)を作ると、全 7 音構成のスケールが構成される』

と、こう覚えておいてください。

で、以上の解説を簡潔にまとめると、実質、『ダイアトニックスケール』とは、

『1 オクターブの中に、全音の距離を 5 つ、半音の距離を 2 つ含む、全 7 音構成のスケール』

と、そういう事になります。

(※細かい話は後々しますが、一般的な文脈では、西洋音楽の調性に伴う、教会旋法(チャーチモード)と分類されているもの(スケール群)を指しているようです)

(※なので、自分で勝手に1オクターブ内に、全音5つ、半音2つを含むスケールを作っても、それをダイアトニックスケールとは呼べない事になりますね)

ちょっと大雑把な分類だと、『ダイアトニックスケール』≒『全7音構成のスケール』みたいにも考えられますが、正確には7音構成のスケールは『ヘプタトニックスケール』と呼びます。

『ヘプタ』はギリシャ数字で、『7』の事です。

なので『メジャースケール』は7音構成なので、『ヘプタトニックスケール』の1種でもあります。

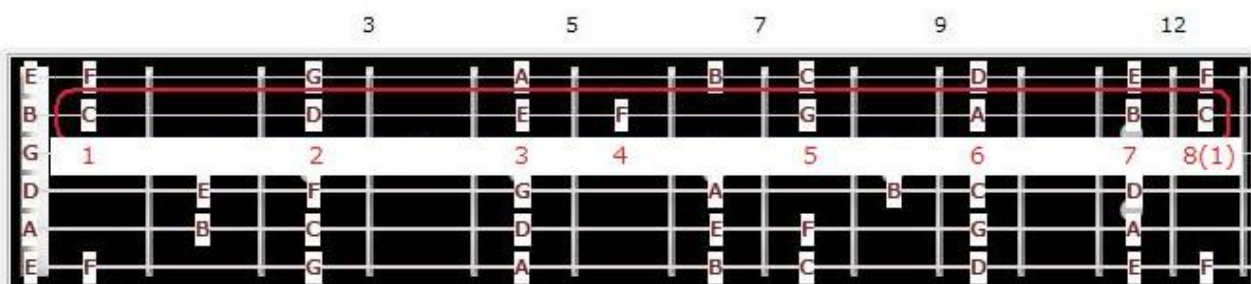
で、もちろん、ここまでの解説からも推測できる様に、メジャースケール以外にも、ダイアトニックスケールには種類があります。

それについては、今後やっていきますので、少々お待ちください。

と、言う事で、『ダイアトニックスケールの言葉の意味』については以上にです。

では、次に『インターバルの呼び方』についてやっていきましょう。

まずは、前回の指板図をもう一度確認しておきます。



この図では各音に番号がついていますね。

CDEFGABの順に、1234567となっています。

これは番号自体はそのまま見て良いんですが、音楽理論では、これを『インターバル的な呼び方』で呼びます。

分かりやすいので、このままCメジャースケールを例にしますね。

まずは最初のC音。

これはCメジャースケールのトニックですね。

なので、一番最初の音は、そのまま『**Tonic(トニック)**』

もしくは『**1st(ファースト)**』でも良いですが、多くの場合トニックと呼びます。

日本語ではインターバルを表す時『**度(ど)**』という言葉を使うんですが、その場合は『**1度(いちど)**』と呼びます。

次の、トニックから見て、**2番目の音**。(※CメジャースケールだとD音)

これもそのまま『**2nd(セカンド)**』と呼びます。日本語では『**2度(にど)**』。

トニックから見て**3番目の音**。(※CメジャースケールだとE音)

これは『**3rd(サード)**』と呼びます。日本語では『**3度(さんど)**』ですね。

トニックから見て**4番目**。(※CメジャースケールだとF音)

これは『**4th(フォース)**』です。日本語では『**4度(よんど、よど)**』

トニックから見て**5番目**。(※CメジャースケールだとG音)

これは『**5th(フィフス)**』。日本語では『**5度(ごど)**』。

もう分かると思いますが、残りも概要は同じです。

トニックから見て**6番目**。(※CメジャースケールだとA音)

これは『**6th(シックス、シクス)**』。日本語では『**6度(ろくど)**』です。

トニックから見て**7番目**。(※CメジャースケールだとB音)

これは『**7th(セブンス)**』。日本語では『**7度(ななど、しちど)**』。

と、インターバル的に各音を呼ぶとこのようになります。

全ての呼び方に言える事なのですが、どれも、トニック(1st)から見て何番目の音なのか？
と言う考え方に基づいて、数字が振ってありますね。

で、次に、7度まで行って、次の音に行くと、最初のトニックに戻ってきますよね？
(※Cメジャースケールの場合、7度(B音)から1度(C音)へ)

その時、トニックは1度に戻ってきたとも言えるし、7度の次の8度とも言えます。
もしくは1オクターブ上のド(Cメジャースケールの場合)とも。

これについての解釈は、トニックでも、1度(1st)でも、8度でも、オクターブでも、どれでもOKです。

実際のプレイヤーの観点からすると、1度と8度の両方の視点から見ておくのがベストですが。

よく、テンションコードで9th(ナインス)とか、11th(イレブンス)とか、
13th(サーティーンズ)とか出てきますね？

これはトニックから1オクターブ上のトニック(8度)まで進んで、また次の一周をすると見た場合、
そのまま数字を進めていった時の呼び方です。

Cメジャースケールで言うならば、

**C(tonic, 1st) ⇒D(2nd) ⇒E(3rd) ⇒F(4th) ⇒G(5th) ⇒A(6th) ⇒B(7th) ⇒C(tonic, 8th, oct)
⇒D(9th) ⇒E(10th) ⇒F(11th) ⇒G(12th) ⇒A(13th) ⇒B(14th)**

と、そのままずっと数えていった場合ですね。

このオクターブ(8度)より上の数字で、テンションの表記として使うのが、
9thと11thと13thと、この様になっています。

さて、以上が、今回覚えるインターバルの呼び方です。

インターバルにはさらに、それぞれの音に分類としてアルファベットをつけるのですが、
それは今後やっていきますので、今回は基本的な数字での捉え方を覚えましょう。

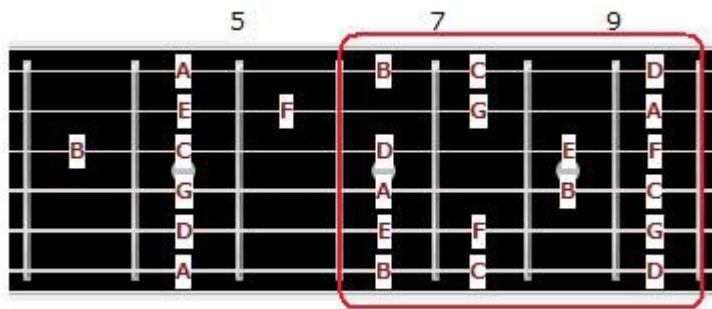
これもただ、順番通りに音に番号を振っただけですから。
インターバルの番号を言われて、瞬時に音の判断が出来るようになるまでは、
少し慣れが必要ですが、やっていけばそのうち慣れてきますので。

今後は、この番号の呼び方(インターバルでの呼び方)が増えてきますので、
 しっかり理解しておいてくださいね。

では、今回最後の内容として、メジャースケールの重要ポジションを3つほど覚えましょう。

これまでの様に、Cメジャースケールを使って、6弦ルートから2つ、5弦ルートから1つ、
 代表的なスケールポジションを練習します。

図、Cメジャースケール、重要ポジション1、(6弦ルート)



今回は、このポジションを指使いを固定して弾いてみましょう。

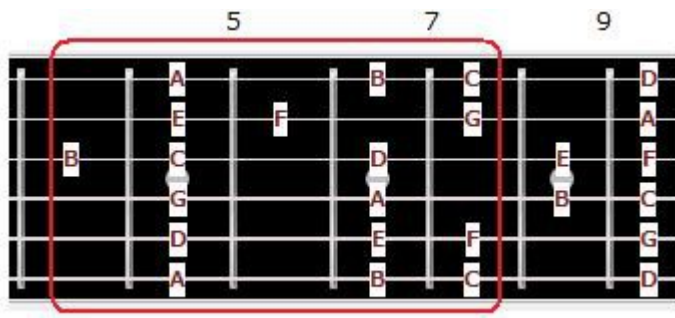
- 7フレットを人差し指
- 8フレットを中指
- 9フレットを薬指
- 10フレットを小指

と、以下の譜面の表記を参考に、上昇も下降もフレット毎に対応する指を固定してください。

譜例、Cメジャースケール、重要ポジション1、(6弦ルート)

(※後の譜面も同じように、指をフレットごとに決めて、使う指を固定します)

図、Cメジャースケール、重要ポジション2、(6弦ルート)



- 5フレットを人差し指
- 6フレットを中指
- 7フレットを薬指
- 8フレットを小指

(※3弦のみ、4フレットを人差し指、5フレットを中指、7フレットを小指で弾きます)

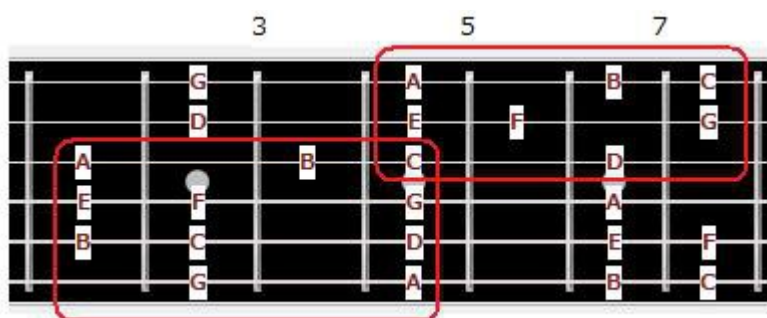
譜例、Cメジャースケール、重要ポジション2、(6弦ルート)

mf

小 人 薬 小 人 薬 人 中 小 人 中 小 人 薬 小

小(薬) 人

図、Cメジャースケール、重要ポジション3、(5弦ルート)



ここは、この図の様に弾く場合、指使いが特殊になるので、譜面の指の指定をよく確認してください。

譜例、Cメジャースケール、重要ポジション3、(5弦ルート)

The image displays a musical score for the C major scale, specifically focusing on important position 3 with a 5th string root. It consists of two systems of music. Each system includes a treble clef staff with a dynamic marking of *mf*, and a guitar tablature (TAB) staff below it. The first system covers measures 3 and 4, and the second system covers measures 5 and 6. The lyrics '中 小 人 中 小 人 薬 人 薬 人 中 小 人 薬 小' are written below the notes. The tablature shows fingerings for each note, with some notes having multiple possible fingerings indicated by numbers 1-5.

いままでやってきた、ペンタのポジションと被る場所もあるので、その辺りも確認してみてください。

この3つのポジションは、楽曲の中でめちゃくちゃ使うので、しっかり覚えておきましょう。

では今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼